

医療法人社団 聖秀会 聖光ヶ丘病院



所在地 / 〒277-0062 千葉県柏市光ヶ丘団地 2-3
☎04-7171-2023
ホームページ <http://seihikarihosp.jp>

◆ 診療科目 ◆

- 内科 ○消化器内科 ○循環器内科 ○眼科 ○整形外科 ○皮膚科 ○精神科 ○心療内科
- リハビリテーション（理学療法・作業療法・言語療法）
- 内視鏡センター（内視鏡検査）
- 健診センター（人間ドック・健康診断）

【病 床】 一般病床131床 医療型療養病床88床
【受付時間】 平 日 / 午前 8:30～午後 12:00
午後 1:30～午後 5:00
土曜日 / 午前 8:15～午後 12:00

「親身に丁寧」患者と向き合う 柏地域で気鋭の頼れる医師団

自身の療養型中心から一般病院へ舵を切って約3年半。柏市光ヶ丘団地の敷地内という好立地で、新しく清潔感ある「聖光ヶ丘病院」。最大の特色は、患者の訴えや悩みに丁寧な耳を傾ける心遣いにある。専門分野を持ちながらも内科全般を修めて臨床能力に秀でた「人と向き合う」医療スタッフは、家庭に身近なホームドクターを大きくした、住民が頼れる気鋭のエリアドクター。「受診してもらえば、親身な診療を実感できるはず」という、運営母体の医療法人社団「聖秀会」理事長でもある関根秀夫病院長に思いを語ってもらった。

医師の原点

「親身に丁寧な医療」が聖光ヶ丘病院の診療理念。関根病院長が医師として立つに至った、強い思いが込められている。

中学校時代、病床で痛みを訴える祖父の患部を一日中さすっていたとき、祖父は言った。「人のために尽くすのも、人間の生きる道だぞ」。祖父には往診してくるかかりつけの医者がいたが、横柄な態度で祖父は往診嫌いだ。具合が悪い患者に、さらに気を遣わせる医師は最低だ。

「おじいちゃん子だった」関根少年の心には、大切な人を亡くした喪失感と引き替りに情熱の火が灯る。「患者に優しい医師になる」。それから約40年。少年の心に灯った小さな明か

一般病院として

大学病院で20年弱過ごした後、縁あって療養型中心だった現病院の前身、柏光陽病院に副院長として移り、約1年後の2001年に病院長に就任した。療養型中心では来院患者数が思うように増えず、現状に飽きたらぬものを感じた。「人のために尽くす」という道のため、地域医療の充実に役立つため、一般病院への転換を決めた。

母校、聖マリアンナ医科大学の後輩医師を数人招くなど改革を徐々に進めると、患者の足がこちらに向き始めたことを実感できた。「来院者が増えたと医療スタッフは忙しくなる。で



病院長自らデザインの入院特別室

も、やりがいも出て来ます」（関根病院長）。

患者増や医療設備充実で柏光陽病院の建物に限界を感じた関根病院長は、移転と新病院建設を模索し始める。すると、約800m離れた現在の地、光ヶ丘団地の敷地内遊休地を利用する話が持ち込まれた。新装開院にこぎ着けたのは2013年6月だった。

関根病院長のモットーは「患者に優しい医師」。専門は総合内科だが、大学病院勤務時代から専門に固執せず、多分野に触れることで内科全般の診療を身に付け、後輩医師にも同じ手法で指導してきた。

「聖光ヶ丘病院の医師と向き合えば何でも話せる雰囲気」といふことを実感してもらえようと思えます。臨床能力は勿論、人柄重視で医師を引っ張ってきていますから。勤務する内科医はみな総合内科医。親身に相談にのってくれ、総合的な内科医療術を持つドクター集団だ。

設備面では、高性能MRI・5テスラ、最新型マルチスライスCTを擁する



聖光ヶ丘病院 病院長
関根 秀夫（せきね ひでお）

聖マリアンナ医科大学卒業後、総合内科を専門に同大学病院で臨床医として経験を重ねる。2000年に柏光陽病院に副院長として招聘され、翌年院長に就任。2003年には医療法人社団聖秀会を設立、理事長として病院経営にも関わり、療養型病院から一般病院に方針転換、「患者様に優しく、親身に丁寧な医療」の実践が功を奏して受診者数を増やしてきた。2013年に聖光ヶ丘病院を開院、気軽にかかれる内科がメインの病院として来院する地域住民が増え続けている。医科大での6年間は奨学金の受給とアルバイトで学費を捻出し首席で卒業した苦学人。休みの間も「如何に患者を気遣う病院にするかを考え続けている」といい、唯一とも言える息抜きは中華を中心にした得意の手料理で家族や友人を喜ばせる瞬間。

正面入口はベージュカラーの清潔な空間



中庭の草花に来院者は癒やされる



正面入口はベージュカラーの清潔な空間

放射線検査室や、日本消化器内視鏡学会指導施設に認定された内視鏡などが整えられている。

病院にこそホスピタリティを

5階建ての病院内には吹き抜けになった中庭があり、3段に仕つらえられた噴水の回りには四季の草花が咲き誇る。患者や来院者の気持ちや和らぐようにとの配慮。入院特別室の内装はベージュ系カラーで統一され、患者目線のつくりを目指した。

設計監理業者に任せず、関根病院長自らが細部にわたってデザイン監修したものの。デザイナーになれたのでは？と水を向けると、はにかみながらも「30年後でも飽きの来ないものを、という思いで考えました。患者さんに来ていただかないと。病院にこそ、患者さんの苦痛を和らげるホスピタリティが必要」と話す。

医療法人の理事長でもあり、診察からは遠ざかっていると思いきや、「いいいえ。現場で患者さんの声に耳を傾けないと、良い病院にはできません」。祖父がこの病院を見たら、どれほど喜んだことだろう！